

猿のお七、牛のお七

丹 羽 みさと

江戸川乱歩の作品には、魅力的な人物が数多く登場する。変装を得意とする怪人二十面相や、その好敵手である稀代の探偵、明智小五郎、そして

明智を補佐するBD(ボーイズ・ディテクティブ)バッチを付けた小林少年などがその代表だろう。このほか、舞台化されている作品の内、「黒蜥蜴」

〔日の出〕昭和九年一月〜十二月の女賊、緑川夫人や、野獣のような爪を持つ「人間豹」〔キング〕昭和九年一月〜翌年五月の殺人鬼、恩田なども、妖しい魅力で人々の心を捉えてきた。

しかし、彼らの人気も、「押絵と旅する男」〔新青年〕昭和四年六月に登場する八百屋お七には敵わない。なぜなら彼女は、「押絵と旅する男」

に登場する遙か以前から、人々を魅了し続けてきたからである。

そこで今回は、「押絵と旅する男」のお七と同じく大衆文化の中から、少し変わった彼女を紹介したい。

◇

八百屋お七は天和の大火で焼け出され、避難先の寺院で恋仲になった少年と再会するために後日放火をし、当時の刑法に則して火あぶりになるとされてる少女である。事件が起きた江戸初期(天和三年)から、仮名草子や講談、歌舞伎や浄瑠璃、瞽女歌や盆踊り歌など有形無形の「物語」となって、日本全国に流布し、現在まで語り継がれてきた(竹野静雄「八百屋お七」の地方伝承——歌謡を中心に——『芸能』昭和六十一年一月)。

のように記されている。

「押絵と旅する男」のお七は、のぞきからくりの中の少女であるが、これもまた、お七伝承の媒体のひとつである。のぞきからくりは江戸中期から昭和五十年代頃まで、日本全国の縁日などでよく見かけた可動式の紙芝居型装置であり、「八百屋お七」はその代表的な演目であった。「押絵と旅する男」に記されている「膝で突いて目で知らせ」という口上や、屋台の様子などは、乱歩の実体験に基づく描写だと思われる。残念ながら、現在では屋外で実演されることはほとんどなくなつたが、関東近郊では佐倉の国立歴史民族博物館や、新潟の巻郷土資料館に足を運ぶと、現在でもその屋台を目にすることができ、これら屋台は両方とも、正面に高低差を付けたのぞきガラスがはめ込んであり、子供も大人も同時に楽しめる構造となつている。

のぞきからくりは紙の芝居であるが、猿の芝居でも、八百屋お七が上演されることがあった。戯作者、平秩東作『東作遺稿』法のつと巻(『新燕石十種』第四卷 中央公論社昭和五十六年)には、江戸の堺町(芝居町)で行われていた猿狂言について以下

天明七年のこと、東作が堺町を歩いていると、黒山の人だかりが見えた。人垣から中を見ると、そこには「鬘をかけ面をかぶりて、身振所作事、上手の芸者の如し、種々の狂言少も間のぬけたることなし」と、猿が数匹、役者のように上手に芸をしていた。すると突然、見物の中から子供たちが、猿に向かって「桃を三四つ投げつけた。瞬く間に猿たちの集中力は途切れ、桃の奪い合がはじまつた。猿曳は、彼らを叱りつつ、芝居を立て直そうと次のような口上を述べた。「扱、唯今仕ます狂言は、八百屋の娘お七と小姓吉三郎、盃をいたさせます所、阿七どの、行義あしく、水臭き二心が見えまする故、吉三郎どの腹たてられまする、是はお七どの仕方よろしうござらぬ程、誤ましたと手をつけて、詫言をいたされよ」この口上によって、上演されていた猿の芝居が「八百屋お七」であつたことがわかる。お七の狂言は、駒込円乗寺にお七の墓を再建するほどの好評を得た「潤色八百屋お七」(寛政五年初演)などが有名であるが、猿芝居でも上演され、のぞきからくり

りと同様に、広く大衆に受け入れられていたようである。

猿曳は、桃に気が逸れたのをお七の「水臭き二心」とし、桃を争って起こったケンカを仲裁し、芝居に戻しているが、これはお七が恋に一途な少女というイメージが根底にあった上での表現だろう。彼女の性格に関しては、積極的な娘として描かれている場合(井原西鶴『好色五人女』貞享三年)や、引つ込み思案な少女と見られている場合(紀海音『八百屋お七』)など、多少の差違があるものの、その点ではほぼすべての作品において、イメージの一致が見られるためである。



また、お七には、恋に身を投じる少女というイメージの他に、火、特に放火をした少女というイメージも内包している。幕末以降発行され始めた新聞もまた、芝居などと同じく大衆文化を支える存在であるが、そこには若い女性が放火した際に、お七を比喩として用いることがしばしばあった。(『読売新聞』明治十四年四月二十三日他)

しかし、明治三十六年三月十八日

の『読売新聞』には、そこからさらにイメージを飛躍させ、八百屋お七に見立てた食べ物の話題が記載されている。

「遊食一品会の趣向(中略)一昨 日午後五時より外神田花清楼別宅に於て開会せり来会の粹士廿七名にて各自東京名所の課題に因み趣向せし品を携へきたり(中略)秀逸ハ本郷と云ふ題(出品人浅草の万場武村)にて八百屋お七を西洋料理のビフテキにて利せ其上に胡椒を振りかけ吉三に利せしハ感服の外なし」

「武村」とは、浅草奥山のおもちゃ屋の老翁で、歌舞伎に詳しい人物であったようだ。のぞきからくりの口上にも、「本郷の二丁目、今日が八百屋の店開き」(林雅彦編著『絵解き万華鏡』三一書房 平成五年)とあるように、芝居に通じた人物なら、本郷から八百屋お七を連想しても不思議はない。しかし、そこにお七の恋人、吉三郎の身分である寺小姓と、香辛料のコショウをかけたところに、この老翁の知識と洒落が効いている。また、幕末明治の牛肉食の歴史を考えると、コショウをあえてビフテキにかけて提供した件は、ハイカラな

白髪老人を思わせて、非常に興味深い。鳥や鹿、猪などは江戸時代にも薬喰として食べていたが、牛を口にする習慣は幕末になるまでほとんどなかったからである。

明治四年刊行の仮名垣魯文『安愚楽鍋』には、牛肉を食べないことが「野暮」だと責める「西洋好き」の男が初篇の第一に登場する。牛肉食があまり一般的でなかった時代であったからこそ、ハイカラ振りをひけらかしつつ牛を食べる者と、それまでの慣習に縛られ牛肉食を忌避する者という対立ができあがり、それを前提とした滑稽さが『安愚楽鍋』に描かれている。

牛肉を食べることへの抵抗が、単なる味覚の違いに由来するのではないことは、文久二年生まれの新渡戸稲造の「幼き日の思い出」(『新渡戸稲造全集』第十九巻 教文社 昭和六十年)にも記されている。のちに、欧

米へ留学し、アメリカ人を妻とした新渡戸も、幼いころ郷里盛岡で「食用として飼育されたのではない」牛肉をはじめ食べて食べる時、それまで教師などから「牛や馬の肉を食べるなど、いやしむべき冒瀆」という観

念を植え付けられてきたため、良心の呵責を覚えたとある。新渡戸が鹿肉の煮込みなどはそれまでも喜んで口にしていたことを考えると、昨今の捕鯨問題ではないが、食べる対象ではない動物という観念に由来していたことがよくわかる。

文久二年生まれの新渡戸が、明治三十六年の時点では四十一歳。翁というにはまだ早い新渡戸でさえ、牛肉を食べることへの抵抗を明確に覚えていたならば、新渡戸よりも年配だと思われる「武村」翁が牛肉を口にすることへの葛藤は如何ばかりであったろうか。しかし、彼は「八百屋お七」のキャラクターによって、見事に牛肉を消化して見せたのである。

このように、八百屋お七は、様々なエッセンスを引き受けながら、時代と共に変化してきた。お七の魅力の源は、この柔軟さにあるのかもしれない。

(立教大学 兼任講師)